

【島根】機器解体に歯科治療まで「究極のへき地」南極での活動とは-三上学・公立邑智病院外科部長に聞く◆Vol.2

「めちゃくちゃうまかった」南極の食事に舌鼓

2024年11月1日（金）配信 m3.com地域版

2022年11月から2024年3月まで、第64次南極地域観測隊・越冬隊の医療隊員として活動した公立邑智病院（邑智郡邑南町）外科部長の三上学氏。「究極のへき地」とも言える現地での生活には驚くことが多かったという。予想外に充実した基地内の設備に加え、調理師が作る料理は「非常に美味」。一方、医師としては今までに行わなかったことも経験した。医薬品の管理や医療機器の解体・新設、歯科治療まで……。南極生活のリアルを聞いた。（2024年9月26日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



三上学氏（病院ホームページから引用）

病気になった娘に「55歳で挑戦する姿を見せたかった」

——三上先生は2022年11月から2024年3月まで、第64次南極地域観測隊・越冬隊の医療隊員として活動しました。過去の報道によると、同隊への応募には病気になった娘さんの存在も影響しているそうですね。

私たち夫婦には3人の子どもがいて、長女がちょうど20歳のときに手足の力が入りにくくなるギラン・バレー症候群にかかりました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の罹患直後でもあり、私が当時勤めていた都立墨東病院への入院時にそう診断されたのです。

ICUに入り、血中の血漿成分を置き換える血漿交換などを行うことによって病気の進行は抑えられましたが、それでも娘は車いすに乗らないと移動できなくなり、また腕にも力が入らなかったため、自力ではこげない状態になりました。当時、看護学校に通っていましたが通学できなくなり、退学を余儀なくされました。

成人式の記念写真を撮った1カ月後に起きたことで、娘の心中を察するとどんなにつらかったことでしょうか。私は何とか前を向いてもらいたいと日常的に寄り添っていくことも考えましたが、そうではなく、「55歳になっても医師として挑戦する姿を見てもらうのも良いのではないかと。人間はいつでもチャレンジできることを自分の背中を通して伝えたい」——。越冬隊の応募にはそんな思いもありました。

——文部科学省のサイトによると、南極は人間による環境汚染が最も少ない地域であり、南極の氷や空気、海を調べることで環境問題に関する基礎情報を集められるとされています。第64次越冬隊の活動テーマはどんなものだったのでしょうか。

日本では1957年に第1次観測隊が昭和基地を開設以降、現在まで継続的に観測が続けられています。この間にオゾンホールが発見やオーロラが発生する仕組みの解明、過去数十万年分の空気が閉じ込められているアイスコアの採取などの成果を上げてきました。

第64次越冬隊ではオゾンホールなどの定点観測を行いつつ、氷の深層にある最古級のアイスコアの採取を目指し、その掘削拠点を建設することが計画の中心でした。南極観測は長期的な視点をもって行われるため、観測を継続し、設備・機器を維持しつつ、掘削の土台をつくるのが私たちの大きなミッションの一つでした。



三上氏ら第64次越冬隊が観測したオーロラ（本人提供）

床暖房に理髪室、バーまで「驚いたのがおいしい食事」

——国立極地研究所のサイトによると、第64次越冬隊は28人で構成され、医療隊員は三上先生を含めて2人です。現地では驚いたことも多かったのではないのでしょうか。

そうですね。私はてっきり活動拠点の昭和基地が南極大陸にあるものだと思っていたのですが、そうではなく、実際は大陸から西に4キロメートル離れたオングル島にあることを渡航中に知りました。基地内の個室は床暖房が備わっており暖かく、理髪室やジム、バーもあります。中でも印象に残っているのが、食事がとてもおいしかったことです。隊員1人当たり1トンほどの食糧を準備していたようで、2人の調理師は洋食のシェフと和食店の経営者でした。さまざまなジャンルの料理が大量に提供され、内心「めちゃくちゃうまい」と舌鼓を打っていました。



昭和基地の管理棟にある厨房（本人提供）

——昭和基地の管理棟にある医務室、通称「オングル中央病院」にはどんな医療設備が備わっていたのでしょうか。

レントゲンや心電図、エコー、血液検査に用いる装置、手術設備、胃の内視鏡検査に使う機器などが備わっていました。ただ、機器によって比較的新しいものがあればとも古いものもあるといったようにばらつきがあり、レントゲンは15年ほど前のものだったので、関電工の社員と私たち医療隊員とで古い機器を解体・撤去して新しい機器を設置する作業を行いました。渡航前にそれに関する研修を受けていたので役立ったほか、専門的な知識と技術を持つ関電工の方が尽力してくださいました。

南極生活で生きた「何でも診る」へき地医療の経験

——国立極地研究所のサイトで三上先生は「越冬生活では医療隊員の仕事がないことが1番」と語っています。

最低限の設備があるとはいえ、できる医療行為には限界があります。毎朝、「今日も何もないように」と願っていました。私たち医療隊員が行っていたのは主に医薬品や医療資材の管理、3カ月に1度の健康診断、そして、可能な範囲での医療行為です。医療行為としては、病気への対応より外傷の処置や治療を行うことの方が多かったですね。

基地外での作業時、例えば、冬場は定期的に除雪をしないと基地がどんどん埋まっていきます。重機が入れないところは手作業で除雪しますが、その際に腰痛になったり指先を切ったりするなどのトラブルを抱える人がいました。医師として初めてだったのは、歯科治療も行ったことです。事前に東京医科歯科大学で研修を受けたのでその経験を生かし、歯の詰め物が取れた人に対して医務室にある歯科材料を使って詰めました。

振り返ると、島根県の離島・隠岐諸島でへき地医療を行っていた経験が生きたと思います。私は外科が専門ですが、へき地では医療資源が限られるので幅広く診療する必要があり、そのころの「どんな人も診る」姿勢を持っていたことは南極暮らしに通じるところがありました。



医務室で診察をする三上氏（本人提供）

——過去に越冬隊として活動した医師の報告によると、「小さなコミュニティに所属するため、医師としてのあり方を深く考える良い機会になった」とありました。

私もそうで、「コミュニティの雰囲気をいかに良好に維持しつつ、隊員の健康や病気の予防に寄与するか」を意識していました。まず、私たち医療隊員が導入したのが朝のラジオ体操です。毎朝7時半くらいに希望者は医務室に集まってもらい、体操をしながら隊員の顔色や様子を見て問題の兆候がないか確認するようにしました。越冬隊においても医師の存在は隊員からすると少し距離があるもので、なるべく話しやすい雰囲気をつくりたい思いもありました。

活動期間の後半、各種作業が佳境に入ってから午前10時と午後3時に休憩のアナウンスを入れてもらうようにしました。隊員がそれぞれの持ち場で過ごす時間が長くなるなか、人によっては根を詰めて作業をし、ひどい日焼けやケガを負うリスクが増えるように感じたので、「車両を降りて伸びをしましょう」「水を飲んでください」といった言葉を無線を通じて投げかけるようにしました。

医師が他の専門性を持った人たちと寝食を共にするのが南極での活動の大きな特徴です。「一致団結」といえば聞こえはいいですが、それは閉鎖的な環境下で「逃げ場がない」ことも意味するので、隊員同士の人間関係が活動の士気に影響するおそれがあります。例えば、調理師が大量に食事を作ってくれて、さらにそれがおいしかったため、隊員の中には肥満気味になる人もいました。しかし、健康診断の際に「食べすぎに注意しましょう」と伝えると、調理師の人はどう思うでしょうか。調理師の方に限りませんが、それぞれの隊員が自身の仕事にプライドを持って活動をしているので、医師としてはそのあたりを尊重しつつ、先ほどの例でいえば、「運動量を増やしましょう」などと伝え方を工夫しました。

へき地・救急・南極での経験を「地域に還元したい」

——そんな活動を経て、三上先生は2024年6月から過去に勤めていた地元・島根県の公立邑智病院で働いています。

私は南極に行く前、16年にわたって都立墨東病院で働きましたが、この間も公立邑智病院の院長や事務長とは親交があり、東京の学会などで会ったときは食事を共にし、「こっちに帰ってくれなかね」などと声をかけてくれていたんです。それに、地元には90歳近くになる両親がおり、長く親元を離れていた私からすると、最期は看取ってあげたい思いがあります。それで、単身地元に戻り、現在は同院の一人外科医として胆石やヘルニア、突発的な外傷などの治療を行っています。

安心したのは、長女の病状が回復し、歩けるようになったことです。日本への帰国時、家族が成田空港まで迎えに来てくれました。事前に状態の知らせは受けていたものの、娘の姿と笑顔を見たときは胸に来るものがありました

ね。自宅に帰ると風船がたくさん飾りつけられており、「おかえり」というメッセージが掲げられていて、家族の温かさ、ありがたみを改めて感じました。

——最後に、医師としての今後の展望をお聞かせください。

私がこれまでに行ってきたことを地域や病院に還元したい思いがあります。島根県のへき地、東京での救命救急、そして、「究極のへき地」とも言える南極での活動を行った医師は少ないと思うので、興味を持ってくれた先生には私の経験や知見をお伝えしていきたいと考えています。実際、町村合併によって病院のある邑南町が誕生してから今年で20周年になるのを記念した町主催の講演会で、町民の方に南極での活動をお話しさせていただきました。

医師として、「困っている患者さんのお役に立ちたい」思いは変わりません。引き続き、私ができることは精一杯やっていきたいです。

◆三上 学（みかみ・まなぶ）氏

1992年自治医科大学卒。公立邑智病院や隠岐病院などを経て、2002年に東京都立墨東病院救命救急センターに勤務。2022年11月から2024年3月まで南極地域観測隊・越冬隊の医療隊員として活動。同年6月から公立邑智病院外科部長。日本外科学会専門医、日本医師会認定産業医、日本DMAT隊員など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

